

本発表では、『精神現象学』「B. 自己意識」章の「主と奴」論を自己意識の陶冶論として捉え、自己意識と物の関係について考察した。その考察を通じて、「主と奴」における奴の自己意識の陶冶と奴と自己意識の次の形態であるストア主義との関係、そして主の自己意識の位置づけを明らかにすることを目指した。

本発表では、「主と奴」の奴の陶冶に焦点を当てる。なぜならコジェーヴ（『ヘーゲル読解入門』）やイポリット（『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』）らのように、主と奴の関係を重視する解釈をとると、自己意識の次の段階である「ストア主義」との繋がりを説明することができないからである。奴が物との関係でしか自立性を獲得できないことを強調することで後のストア主義との繋がりをより正確に捉えるようとした。

まず初めに、「自己意識」章の前半部で、自己意識が自立性と非自立性という矛盾した性質を抱えた存在だということを指摘した。だが、自己意識は当初矛盾した性質を一度に抱えることができない。そこでヘーゲルはそれらの性質を二つの自己意識に振り分ける。それが主と奴である。主は自立的な自己意識であり、奴は非自立的な自己意識である。

その次に「主と奴」で主の自己意識がどのようなものなのかを考察した。その中で、主の自立性が奴を前提としなければならないことと主が個別的な契機に囚われた存在だということを明らかにし、奴に論点が移行していることを確認した。

最後に奴の自己意識の陶冶について考察した。奴は主の支配の下で陶冶を完成させる。この陶冶が完成するためには「死への畏怖」「主への奉仕」「労働」という三つの要素が揃わなければならない。そして本発表では、奴の陶冶において主はこの三つの要素がうまく働くための一つの契機、つまり上記の三要素を導出するための単なる契機でしかないと主張した。

確かに奴は自分自身を陶冶し、自分が自立的な存在だと自覚する。しかしそれはあくまで奴と物との関係においてでしかない。つまり他の自己意識から自立的だと承認を得たわけではない。奴は他の自己意識との関係から、（前段階の欲望の自己意識と同じく）物との関係へとうち戻される。自己意識が物を労働による製作物と捉え、自分の運動の結果として捉えるとき、思惟する自己意識が登場する。そしてその思惟する自己意識の自分との直接的な関係に固執する形態がストア主義だと主張した。

ところで、今回の発表では多くの貴重なご意見、ご質問をいただいた。まずは、本発表のキーワードの一つの「自立性」という用語についてである。具体的には「欲望の自己意識」の自立性と「主と奴」のそれは意味が違うのではないか、というものだった。また、次のような質問もいただいた。主が奴に生活を支えてもらわないといけないことは初めから明白であり、わざわざ「主と奴」によって、「主が非自立的であり、奴が自立的である」と主張する意義はないのではないか、という質問である。以上の質問には当日十分にお答えすることができなかったが、今後の研究を進める上で有益なものだった。これらの質問で得られた視点を活かして研究を進めていきたい。